マコと一葉の剣　グラス・オニオン

pimpdaddy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マコと一葉の剣　グラス・オニオン

【Ｎコード】

Ｎ７９２２Ｚ

【作者名】

ｐｉｍｐｄａｄｄｙ

【あらすじ】

十二才の少年マコルディス・クイーデル王子（通称マコ）はクーデーターと共に国を追放された。サンガルド王国で王の側近だったアルミゲウ・ギース（アル）それに新たに加わった旅の仲間であるリーアムース・ベルドラド（リア）とクローネンバーグ・ユイソナー（クロネ）と共にシエラの街に行き着いた。

その街で人々は古の魔女の脅威に怯え、どこからともなく現れたヴァイオレーターと呼ばれる怪物の来襲に怯えていた。それに加え、

ヴァイオレーター退治と称して街で好き放題する魔導士軍団に街は不安と不満を抱えている。

マコたちは街を支配するこれらの脅威から解放しようと立ち上がるが、やがて影が恐ろしい陰謀を繋ごうとしていた……

旅の仲間と一葉の剣

巨漢の男が狭く薄暗い路地を駆け抜けて行く。
男は建物の裏手に積み上げられた木箱や樽を、その巨大な体とは裏腹に、巧みに避けて走った。途中でいくつかをなぎ倒したが、それは追手を妨害するためだった。
一方、男を追う警官隊は額に汗の玉を浮き立たせながら、進行方向上にある障害物をたどたどしく乗り越えた。
男は黒いボロきれのようなローブのフードを頭からすっぽり被り、全力で走っているにも関わらず、汗一つかいていない。それどころかフードの下からは唇がにっと吊り上がり、男がニヤついている事がわかる。
余裕すら見せている。
男は四件の殺人を犯していた。一件目は三人、二件目はふたり、そして三件目と四件目はそれぞれひとりずつ。生意気な態度を取ったヤツらに思い知らせてやったのだ。彼を相手に自分たちがどれだけ無力かという事を。そして無能な警察から逃げ切る事は、男にとっては簡単な事だった。
「逃げても無駄だ！　追いつめられるだけだぞ」
うしろからひとりが叫んだが、男の口もとを余計に吊り上がらせただけだった。
狭い路地をしばらく走ると、光とともにざわめきと熱気が漏れ出す通りにさしかかった。路地を抜け出し出店の建ち並ぶ大きな通りに出る。
にぎわう客たちでつくられた群れの間を、男は無理やり掻き分けながら進んだ。客たちはうしろからいきなり押されたり、体をねじこまれたりして、驚きの声をあげた。また、罵声も聞こえた。
絶対に捕まるものか。大衆を掻き分けながら男はニタニタ笑って

思った。能のない警官屋どもに、この大魔術師であるジゴラさまが捕まるわけはないのだ。
決して。

十二才の少年マコルディス・クイーデル――ふだんはマコと呼ばれていた――は人ごみでにぎわう市場を歩いていた。きらきらと輝く目が市場中のあちらこちらへ行ったり来たりを繰りかえしている。ずっと旅をしてきた彼にとってこんなに大きな街は久しぶりの事であったし、にぎわう人々の群れもまた懐かしみのあるものだった。
「しっかし、まあ、これだけ大きな街だと、こうもにぎわうもんなんだな」
アルミゲウ・ギースは幼いマコにくらべるとやたらと背が高かった。一九才という年齢を考えると、成長期を過ぎた体はもう大人としてできあがっており、ふたりの身長差はあって然るべきだったが、それをふまえたとしても、アルの身長は高かった。
アルは金色の長髪の持ち主だった。よく天使の毛のようだと言い表されてきたし、女の子たぎが思わず振り返ってしまうほど整った綺麗な顔立ちをしていた。瞳の色はハシバミ。腰にはベニヤの板を何重にもしてかたどったような短剣を差している。短剣とはいえ木製であるため、刃もなく、切ることはできない代物だった。
対するマコは赤みがかった茶色の髪にグリーンの瞳。背中には自分の背丈と同じ大きさの大剣を背負っていた。
「うん、そうだね。でも、ずっと旅して来て初めてわかったけど、ぼくらの街ってほんとうに大きなところだったんだね」どこか寂しげで悲しみに満ちたマコの声。旅立った故郷の事を思っている。
「そうだな。いまはもう戻れないが、いや、いつか必ず戻ってみせるさ」
アルはマコの頭をぽんと叩いてやった。これはアルがマコを元気づける時にやるしぐさで、これをやられると彼はいつも勇気を奮い起こされるのだった。

そういった信頼関係がふたりの間には築かれているし、アルは必要ならば身をていしてでもマコを守る心づもりでいる。マコはそれを知っているし、だからこそアルを完全に信頼してその身を預けている。

「なんなのよ、ふたりしてしんみりしちゃって」一緒にいたリアが不満そうな声を漏らした。「せっかくの市場なんだから、もっと明るくいこうよね。ホラ、ああおいしそうな匂いもする！」

リアの本名はリーアムース・ベルドラドといった。ふたりが彼女と出会ったのはついこの間の出来事で、この家出少女はふたりが断ったにも関わらず勝手に着いて来てしまった。出会いは決して深い意味のあるものではなかったが、こうして彼女はマコたちの仲間としていまでは深い関係にある。

そしてもうひとり、旅の仲間がいた。マコよりもふたつ年上のお姉さんで、クローネンバーグ・ユイソナー。仲間からはクロネと呼ばれていた。髪の色は黒く艶やかで、前髪は眉の上でまっすぐに切りそろえられており、うしろ髪は膝裏の間接部分にまで届いていた。目は少し赤みがかった濃い紫色をしており、その瞳の中心部から外に放射線状の模様があった。彼女の瞳はすべてを飲み込もうとしているように、引きつけるような力があった。

マコ、アル、リア、クロネの四人は北に向かって旅を続けており、街を通り抜けるついでに市場の観光をしていた。

たのしい見学になるはずだったのだが、いつもトラブルを呼ぶ四人のことだ、そのトラブルがまっすぐ彼らの前方からこちらに向かって来ていた。まるで磁力に引き寄せられるかのように。

その気配をいち早く察知したのがクロネだった。細い人差し指をまっすぐ前に向け、首だけをマコに向けて言った。「なにかしら。あちらから騒がしいのが来るけど」

マコはクロネに合わせて立ち止り、彼女が指差す方向を凝視した。

「ホントだ。なんだろう」

マコは首を傾げて考えた。遠くで群衆がざわついている。そのざ

わつきがだんだんとこちらに近づいているのがわかった。
「お祭り騒ぎってわけでもなさそうだな。ん？　なんだかうしろも騒がしいぞ」
アルの言った通り、うしろからもなにかの騒ぎが聞こえる。「どいてください」などと叫び声が聞こえた。
前方からもやはり声が聞こえた。なにかを追っているのだろうか。「待て」やら「逃げられんぞ」などの叫んでいるようだ。どれも怒まじりの声だった。
始めのうちはなにが起こっているのかマコにもわからなかったが、だんだんとその正体がつかめてきた。
前方からみすぼらしい格好をした男が人ごみをかきわけて出てきたのだ。そのうしろからはその男を追う警官たち。どうやら、人ごみの中で捕り物劇が行われているらしい。
ぼろぼろのローブを全身に被った男は、進行方向からも追っ手が来ているとわかると、立ち止まってどちらに進もうか迷いだした。だが決して男は焦ってなどいなかった。それどころか楽しんでさえいるようにマコには見えた。
それがあまり良い兆候だとは思えない。
そのうちに追っ手が前後から近づいてきた。
警官の必至の形相から、この男が殺人を犯したのではないかとマコは懸念した。実際、男の目からは人を平気殺せる人間特有の氷のような冷たさを放っていた。
「さあ、もう観念するんだ」警官隊はジゴラをとり囲むと、拳銃を向けた。
そう言われても諦める男ではない。彼はすぐ近くにいたマコに目をとめると、マコの腕をぐいっと引っ張って、一瞬ののちに捕らえてしまった。男の左腕がマコをがっちりとつかまえ、右手はマコの頭に向けられている。密着した男の体から汗と尿の入り混じったような悪臭がマコの鼻を刺激した。
「おめえら、身を引かねえと、このガキの頭が吹っ飛ぶぜ」

自称大魔術師ジゴラが脅しをかけると、警官たちがひるんだ。彼に向けられた手はぼんやりと光っており、その道に精通していない一般の人間からも、男が魔法を使おうとしていることがわかる。そして男の言う言葉が真実だということも。

アルたちは余裕の表情で突っ立ったまま動じていない。どうやら助けてくれる気はなさそうだ。自分でやれということか。どのみち、骨の折れる仕事じゃないさ。

「ハッタリじゃねえぜ。さあ、道を開けろ。こいつの頭が吹き飛ぶまえに！」

ジゴラが命令をするが、どうしても警官隊たちはこいつを逃がす気はないらしい。この男がしでかしたのはそれほど重要な罪なのだろうか。マコにとってはどうでもいいことだったが。とにかく男がはやく自分を解放してくれないかと願った。なにしろこの男は臭いのだ。

「落ち着け、おまえは私欲のために大勢殺した。また罪を重ねる必要もあるまい」

男を追って来た警官隊のなかでも老年の男が辛抱強い声で言った。威厳のつもりか、鼻の下にはちょびひげを生やしている。

「ちっ、状況がわかってねえようだな」ジゴラがぼそりとつぶやいた。

それを聞いてアルがジゴラのまえに歩み出した。

「なんだ、てめえは？」ジゴラは相変わらず、すごみの効いた声で暴言のように吐き捨てた。

「その子を放したほうが身のためだと思うがね」アルはたしなめるように言った。

「なんだとお？」ジゴラは不服そうにうなった。「おい。こら、ぼうず。俺様はなあ、魔術の天才なんだよ。自慢じゃあないが、この魔術で何人も殺してきた。このガキの頭を吹き飛ばすぐらい、わけねえんだよ」

そんなもの、自慢でもなんでもないじゃないか。ジゴラの腕のな

かでマコは思った。人を殺した事を自慢できる人間なんて、きっと神経をすりきらせてしまっているにちがいない。
「あまり犯人を刺激しないでください」
警官隊のひとりがアルに注意した。丸眼鏡をかけていて、どことなく頼りなさそうだ。素の表情なのだろうが、困り顔に見えた。実際にアルの行動には困っていたのだろうけど。
「そうゆうこった。おい。あんたらも道をあけないと俺様を刺激することになるぜ、警官屋さんたちよ。その刺激で爆発しちまうかもしれねえ。そうしたら、このガキの首はあるべきところにゃ、もうくっついてねえぜ」
その言葉に警官隊たちは動揺し、うしろにさがった。
「やれやれ、忠告はしておいたからな」言いながら、アルもさがった。
ちらりとアルに目をやったのだが、彼は薄ら笑いすら浮かべているように見えた。どうやらこの状況を楽しんでいるようだ。
などと考えていると、なにかが背中の剣に触れる感触がした。
「なんだか知らねえが大切そうにしてるじゃねえか。見たところ剣のようだが、上物じゃあないのか？」
どうやらこの魔術師の男がマコの大切な剣に手を触れたらしい。他人に大切な剣を触られたことで、マコはむっとした。
「そんな汚い手で触らないでよ」この男の臭くて汚い手が触れるのはたまらなく嫌だった。
マコの言葉を聞くと、ジゴラは不機嫌そうな顔をし、その顔が怒りに揺れた。
「ガキのくせにこのジゴラ様に命令しようってのか。もう勘弁ならねえ。殺してやるわ！」
ふたたびジゴラが右手をマコに向けると、てのひら付近の空気が揺れ、赤く光った。熱も帯びている。
「まて、止めるんだ、ジゴラ！」ちょびひげの警官が叫んだ。
「無駄い。思い知らせてやる！」

ジゴラがマコの顔に向かって炎を放とうとすると同時に、マコも行動に出た。素早くジゴラの手に自分の手を向けると、彼も魔法を放ったのだ。

火を消すなら水をかけてやればいい。

とは口で簡単に言えるものの、魔法でもってそれを実行するのは至難の業だ。なにせ空気中にある魔法の素である元素を魔法の実体であるエレメントに変えるのには多少の時間を要するからだ。だがマコはそれをいとも簡単にやってのけてしまった。

マコの水のエレメントがジゴラの炎のエレメントを飲みこみ、最初からそこになにもなかったかのように消し去ってしまったのだ。

「僕だって魔法は使えるんだ。『ガキ』だからってあまくみたのが間違いだったね」

マコはジゴラの胸に手を当てると、炎のエレメントを発生させた。炎が燃え上がり、ジゴラは飛び退いた。

ジゴラは胸を両手で叩きながら、燃え移った炎を消した。

炎が消えると、ジゴラはマコを睨みつけた。

「だから何だってんだ？　ちょっと魔法ができるからって調子に乗りやがって。あまり大人をなめるなよ！」ジゴラは肩で息をしながら怒鳴った。「こうなったら、この市場ごと消し去ってやるわ！」

ジゴラは両手をまえに突き出すと、そこから風のエレメントが発生し、ぐるぐると渦まいた。エレメントはどんどん大きくなり、渦まく風は竜巻となりその竜巻がさらに成長を遂げようとしている。

「マコ、やばいぞ！」うしろでアルが叫んだ。

マコは背中の剣を取り外した。

鞘は右側面から空洞になっており、柄を握って横に倒せば、簡単に取り外すことができた。

マコは剣で成長途中の大きな竜巻を斬った。

剣が一瞬の輝きを放ったかと思うと、竜巻は消滅してしまった。

それを見守っていた群衆は息を呑んでいた。マコの迅速かつ相手を上回る技術よりも、彼らはマコの手にしている剣の美しさに魅入

られていた。
剣の刀身と柄の間には鍔がなく、奇妙な形をつくっていた。柄は銀色で、ライフル銃の銃床のような形をしている。刀身は光沢を放つ濃緑色で、木の葉をまんなかで二つ折りにしたような形だ。桜の葉のふちのように刃の部分が細かなギザギザになっている。この刀身と柄が大剣を一枚の葉のように見せていた。
ゆえにこの剣は一葉の剣と呼ばれている。
ジゴラは怒りにまかせて右手を振り上げ、もういちど炎のエレメントをつくってそれをマコにぶつけようとした。
だが、マコのほうが行動は早かった。
一葉の剣を軽く振ると風が発生し、ジゴラを押し倒してしまったのだ。
マコはジゴラに近づき、顔面近くの地面に剣を突き立てた。刃が触れてもいないのに、ジゴラの頬は切れた。傷は深くないが、出血があったし、男をおどすには十分だった。
「ほんとうなら、首が落とされているところだったね」マコは笑顔になってジゴラにそっとつぶやいた。
それで十分だった。男の戦意を失わせるには。
マコは満足そうにうなずくと、剣を逆手で持って切っ先を鞘に突っ込むと、それを柄を上に押し上げることで剣全体を鞘に納めた。

「ご協力ありがとうございます」警官のひとりが言った。この警官は顎の下に小さな切り傷があった。小さいときに転んで怪我したもので、決して喧嘩や逮捕劇での格闘の末にできた怪我ではなかった。彼は体格こそ良いものの、暴力を極端に嫌っていた。
「うん、大丈夫。自分を守っただけだから」
それが当然とでもいうように、ジゴラを倒してしまった少年の態度は素っ気なかった。
「なにが身を守っただけよ」少年と一緒にいた赤毛の少女が苛立たしげに言った。髪型はショートヘアで、半袖シャツにつなぎの短パ

ンという少年のような格好をしている。その少女がマコの頭頂部に拳を落とした。「巻きこまれるかと思ったじゃない」
「痛いよう。リア」マコは殴られた箇所をしきりにさすった。
「あら、マコなら大丈夫よ。絶対に他人を巻き添えにしないわ。わたくしは信じていましたもの」クロネが横から出て来て、マコの頭を確認した。「まあ、ひどい。こぶになっているじゃない」
「うん。ぼくは大丈夫だよ。それよりもさっきの竜巻の被害は？」マコはクロネの手を振り払いながら言った。
「マコが一瞬で消し去ってくれたから、皆無さ。唯一の被害と言えば、一葉の剣で切られた男の頬くらいかな」
アルは警官たちによって両脇をがっちりとつかまっているジゴラを見た。一瞬、目が合ったが、すぐに逸らされてしまった。まあここで、魔法による悪あがきをする気はなさそうだ。
「さてと、旅の再開だ」アルは言った。
一同はうなずくと、アルを先頭にもともと向かっていた方向に歩き出した。
「あ、ちょっと。なにかお礼を――」
警官の申し出も聞こえないように、マコたちは歩む足を止めなかった。警官たちはその背中を呆然と見ていた。
「彼らはいったい何者なんだろう？」
顎に傷のある警官が言った。隣にいた警官は、さあ、と首を傾げた。

クロネがコケた。
足をもつれさせ、前方に豪快に倒れたのだ。両手を突き出したその姿は空を飛んでいるかのようだった。実際、地面に顎を撃ちつけた衝撃で意識が一瞬だけぶっ飛んでいたが。
「いったああい！」クロネは泣き叫びながら立ち上がった。「何なのこの道は。デコボコしすぎよ」
黒いワンピースドレスの長いスカートの裾をはたく。

「あんたって良く転ぶわね。本当に歩くのが下手くそ。何度転べば気が済むのよ？」リアが呆れて言った。
本日八回目である。それはクロネも良く心得ていた。何回転べば自分の気が済むのかは知らなかったが。
「う、うるさいわね。何回転んだってわたくしのかかか、勝手よ。口を滑らせっぱなしのあなたに言われたくないわね」
クロネの言った『何回転んだって』のくだりは良くわからないが、リアが口を滑らせっぱなしだということにはアルも納得した。言わなくても良いことばかり言ってしまい、そのせいでトラブルを起こすことが多かったのだ。
「ああら。そんなに饒舌なのがうらやましいのかしら。この場合、上舌と言うべきかしらね。あなたの口は喉を詰まらせた老人のような言葉しか出せないものね。オホホホ」と下品に気品高くリアは笑ってみせた。
クロネは顔を真っ赤にして震えている。言いかえしてやりたいが言葉が思いつかないといった感じだ。
「あ、あなたは、じゅんか――そうよ！　あなたは潤滑油を塗りたくってるのよ！」
やっと出て来た言葉がこれだ。リアはぽかんとしている。まったく効き目なし。
言いたいことはわかるぞ。うしろでアルがうなずいた。潤滑油を塗ったように言葉が滑り出てくるのだと、君は言いたいのだろう。だがそれは逆に褒め言葉になっているのではなかろうか。
その台詞に満足したのか、クロネはどうだと言わんばかりの目線をリアに送っている。
「そんなんじゃ、わからないわよ。ホレ、言いたいことがあるのなら、わかり易く伝わり易く言ってごらんなさい」
リアは頭を少し上に傾いで、目線だけでクロネを見くだして言った。
「うう……それじゃあ……ええっと……」

効果がなかったことを知ると、クロネは次に何かびしっとした言葉を決めてやろうと躍起になった。だが、いくら頭をフル回転させようと、ついに言葉は見つからなかった。どうやら彼女の例文辞書は落丁だらけらしい。ついにクロネはマコに泣きついた。

「何とか言ってやってよ！」

よしよし、と頭をなでるマコを見ているとどっちが年上だかわからなくなる。たしかクロネの方がふたつ上だったよな、とアルは思い出していた。

「リアもいつも言葉が多いんだよ。少しは気をつけてよね。これはいつも思ってることだけど」マコは言った。「あとクロネもリアがあなのは知ってるんだから、少しは聞き流すことを覚えないと」

「聞き流すってのは聞き捨てならないわね」とリアは言ったが、少しクロネで遊びすぎたと、この辺にしてやることにした。

クロネもマコに言われたのなら、と仕方なくリアの事は忘れようとした。

言い合いが治まると、四人はふたたび歩き出した。いつものようにおぼつかない足取りで、クロネは後方に少し離された。

そして本日九回目となる転倒を果たした。

夜には彼らは崖の淵にいた。さきほどの街を出てずっと進み、小さな林の細い道を辿ったら、崖に行き止まったというわけだ。しかもそこは船の先端のように突き出ていて、狭い。日も暮れて戻る事もできず、仕方がないので四人はここで野営することに決めた。

焚き火が四人の顔を薄いオレンジに照らし、ちらちらと影を躍らせている。マコの隣にはクロネが寄り添い、火をはさんで向こう側にアルとリアがちょっと離れて座っていた。

「あーあ。いつも野宿ばっかり。たまにはふかふかベッドで寝たいわ」リアは不服そうに言った。「市場ぐらいゆっくり見たかったのに、すぐに街を出るし。観光ぐらいしてもよかったんじゃない？」

「仕方がないだろう、あんな騒ぎのあとじゃあ。それに金がないん

だから、物も買えないし」アルが諭すように言った。
「アンタたち、本当に王族なの？　まったくの貧乏じゃない」
「王族なのはマコだけさ。おれは付き人みたいなものだった。それに言っただろう、おれたちは追放されたんだって」
「はいはい。敵に王国を乗っ取られたんでしょ。それだって、あやしいわねえ」
　リアは目を細めてアルを見た。
「あなたって、ホント、世界の情報に疎いのね」とクロネ。「一ヶ月前にサンガルド王国でクーデーターがあり、王子が追放された。それって、絶対にマコのことじゃないのよ」
　それを聞いてリアが首を横に振った。
「ふたりが本当のことを言っているとは限らないわよ」
「あら、一緒に旅をしてきてふたりが信じられないっていうわけね、あなたは」
「そうわ言ってないわよ、ただわからないって言ってるだけ」
「そう言ってるように聞こえる」
　クロネが目を細め、リアを睨むようにして見つめた。
「オッケー、わかったわよ」とリア。「アタシだって本気で疑ってるわけじゃないわよ。それで、追放された王子さまはこれからどこへ向かおうというわけ？」
「それはわたくしも知りたいわ」クロネが同調した。「いままではただなんとなく着いて来ただけだもの。これからは目的を持って行動したいわ」
「ここかずっと北へ向かってある人物に会おうと思ってるのさ」アルが答えた。「きっと協力者になってくれるはずだ。再び俺たちの手に国を取り戻したい」
「なるほど、じゃあ仲間を集めて国を乗っ取った敵をやっつけるってわけね」
　リアの言葉にマコは苦笑いになった。
「説得するに決まってるわ！」クロネが声をあげた。

「なんで、敵を説得しなきゃいけないのよ！」リアが言った。
「それはクーデターの首謀者がマコのお母さんだからじゃない」クロネは声を落として言ったが、その声は十分マコにもアルにも届いていた。
「うん、倒すよ」それを聞いていたマコがきっぱりと言った。「説得できる相手なら、もうとっくに父さんがしていたはずだ」
マコの父親であるモーガンは国王として、なにより彼女の旦那としてマコの母親を説得ようとした。だがこのクーデターは最初から周到に用意されたものであり、彼女がマコの父親に近づいた時にはすでに計画は始まっていた。そして彼女はマコを生んだ。その出産が計画的なものだったかどうかはわからないが、国王殺害は彼女の計画のリストに載っており、見事に実行されたというわけだ。
さらにマコには兄がいた。ルーカス・クイーデル。ルーカスは母親であるサーラに引きこまれ、一緒に国取りを行った。彼はマコを処刑する事を考えていた。兄は弟の才能に嫉妬していたのだ。しかし母親のサーラはそれに反対し、マコを国から追放した。
それが情けなのか母親としての情なのかはアルには計り知れなかったが。
マコの側近であったアルは、混乱の最中、一葉の剣を渡され、追放されたマコのもとへと送くられた。こうしてふたりの旅は始まったわけだ。アルに剣を渡し逃がしてくれた老アルテネローは、いつしかマコが帰って来て国を取り戻してくれる期待をその震える唇で口にした。だがその望みが叶うかどうかは、アルでさせ知らない。
しばらくのあいだ孤独の旅がふたりで続いた。いまでは仲間が四人に増えた。楽しい仲間だ。
「だから、この旅はきっと過酷なものになると思う。ふたりとも嫌なら無理に着いてこなくていいよ。別に無理に連れ回しているわけじゃないから」
「わたくしは、マコに命を助けられたもの。あなたの助けになるならなんだってするわ。そのために着いて来たんですもの」クロネが

意思を示した。
「アタシだってアンタたちといたほうが楽しいもんね。それに勝手に着いて来てるのはアタシだし」
ふたりが彼らと共にいる道理はないのだが、それでも一緒にいてくれてマコは嬉しかった。すくなくともこうして話している時はこれからの不安や、過去への悲しみを忘れることができた。
「さてと――」アルはおもむろに這って移動すると、小さな茶色い鞄を手に取った。ここにはなけなしの全財産やら、食料などといった旅の必需品が入れられている。その中から小さな木彫りの像を取り出すと、アルは元の位置にもどって来た。
「まあ、毎晩と飽きないわね」リアがなかば呆れ声で言った。
「習慣というやつだよ。それに人は毎日同じ生活の繰り返しの中にいる。それも飽きずにね」
アルが木彫りの像を地面に立てて置くと、焚き火が像に神々しいオレンジ色の影を投げかけた。像はアルが彫った手作りで、世界を創造した女神の姿をしている。この女神の像に向かって毎晩、寝るまえに祈るのが、彼の日課であった。
アルは毎日、この信仰心を絶やしたことはない。
彼は目を閉じ、ゆっくりと祈りの言葉を口にした。
「夜の監視者よ、月の女神よ、母なる神よ。今日という日の御恵みに感謝します。火、水、土、風に宿る精霊神にも同じ感謝と敬意を……そして闇から我らをお守りください。我らに安らかなる眠りのお導きを。そして新たなる一日という安全が我らにあらんことを……」
アルに続いて三人も同じように祈りの言葉を口にする。最初は嫌がっていたリアも覚えてきたようで、すらすらと文句を読んだ。クロネはまだぎこちなく、アルの言葉を聞いて、それになんとか追いつこうとしているようだ。
祈りが終わるとアルは女神の像をまた鞄の中にしまった。
「さてと、寝るか」アルはそのままごろんと横になり、倒木に背を

当てて寝た。リアも大きなあくびをひとつして、両腕を頭上いっぱいにのばしながら、倒れた。マコは一葉の剣を胸もとにひきよせて、赤子のように眠った。その近くではクロネがマコの寝顔を幸せそうに見つめて満足そうにうなずいた。そしてゆっくりと目を閉じた。

焚火の炎はまるで女神の守護のように、眠りについた旅の四人を守るようにしてそのオレンジ色の光で包みこんでいる。実際、この炎には悪しき気を寄せつけない力があった。

炎はしばらく彼らを見守り、日が昇るにつれてそっと姿を消していった。

ヴァイオレーター

日が十分に昇るころには火も消え、薪はすべて灰と化していた。旅の一行はすっかり目覚め、出発の準備も整っていた。

「いったん引きかえして、昨日の分かれ道で別の道を辿ろう」アルが言った。

「まあ、そっちにしか道はないもんね」とリア。

一葉の剣を鞘のベルトを使って背中に取りつけると、林へと続く道を凝視した。その目は真剣そのものだ。

「どうしたの？」あまりにもマコが林を凝視しているので、心配になったクロネが首を傾げた。

マコは片手をクロネに向けただけで、なにも言わなかった。ただじっと、林のほうを見つめている。彼の耳は奇妙な音を感じ取っていた。軍団が闊歩するような音。地面が震えている。

「なにか来る」マコは言った。

「なにが――」アルは質問の途中で口をつぐんだ。いまやその音はアルにも聞こえていた。音は確実に近づいている。

「なにあれ？」リアが指差した。林を突っ切るまっすぐな道、その木立のあいだの遥か向こうに点が見えた。その物体がこちらに近づいているようだった。しかも目測ではかなり大きい。

「あら、なにかしら？」クロネもそれに気づいたようだ。

「さあな、嫌な予感しかしないけどな」アルは額を右手でぴしゃりと叩いた。

「うん……」マコは心ここにあらずといった声を出した。自然と手が剣の柄にのびる。

点は、はっきりと形がわかる程度にまで近づいていた。白銀色の球体が、こちらに向かって転がってきているのがわかる。その球体は太陽の光を反射させ、ぎらぎらとした光をいやらしく放っている。

「あれは……」クロネが両手を口に当てた。

「ヴァイオレーターだな」アルがクロネの言葉を引き継いだ。
ヴァイオレーター――一ヶ月前、どこからともなく現れた怪物の呼び名だ。気性は非常に荒く、凶暴。その数は日を追うごとに多く発見されており、大量に人間を捕食することから世界を滅ぼす存在などと言われている。ヴァイオレーターの出現により、カタストロフィーを唱える者が現れるほどだ。
滅亡の噂などいつの時代でも他にやることがないのかと思うほど、ほぼ毎日持ち出される根拠のない議題だった。
転がってくるヴァイオレーターに目を凝らすと、完全な球体ではなく、帯状のウロコでおおわれていることがわかる。ある世界ではダンゴムシという昆虫に見えただろう。だが、マコたちにはそんなことはわからなかった。ただ球体のヴァイオレーターが転がって来るように見えるだけだ。
「俺に任せろ」アルが前に出た。
「大丈夫なの？」マコが訊いた。
「まあな」彼は腰に差した木製の短剣に手を触れながら前に出た。
「自信がないなら、変わるわよ」うしろからリアがふざけて言ったが、アルはそれを無視し、答える代りに短剣を体の前で立てた。
「樹木は土に宿り、水がそれを育む」アルは唱えると、短剣を地面に突き立てた。すると、その部分から転がりくるヴィオレーターに向かって地面が割れた。割れ目は蛇のようにうねりながら敵に向かってのび、その先から一本の木の根が生えた。次の瞬間にはたちどころに無数の根が地面から突き出し、みるみるうちに木の壁をつくった。
壁はヴァイオレーターの進行を妨げた。相手がぶつかると、まず壁が震え、つぎに大地が揺れた。
「止まったか？」揺れがおさまると、アルは木の壁を凝視しながら言った。
「静かね。死んじゃったんじゃない？」リアが言った。
「まさか、壁にぶつかっただけで……」アルが答えた。

「ねえ、なんか聞こえない？」クロネが不安そうな顔をアルに向けた。
「これって、まさか――」マコは叫んだ。アルも彼と同じ答えに至ったのだろう。驚愕の顔でうなずいた。
「なんなのよ、これ？」リアが不安になって声を張り上げた。そうしなければいけなかったからだ。さきほどまで小さかった音がいまは耳を聾せんばかりに大きくなっている。なにかがアルのつくった壁の向こうで唸っている。その音は空気を震わし、耳をつんざく勢いだった。
「なにも訊かずに壁の前から離れるんだ」アルがゆっくりと警告した。マコもクロネもおとなしくその指示に従ったが、リアだけは納得がいかないようだった。
「なんでよ？」とリア。
彼女、その理由を聞くまで指示に従うつもりはないんじゃなかろうか。マコは心配になった。その説明をしている時間なんてないのに。時間がないことは音の回転速度でわかる。マコはその音の正体を知っていたし、それが危険極まりない音だということも承知していた。
アルはリアの肩をひっつかむと、マコたちとは反対の方向へと引っ張った。その瞬間にそれは起こった。アルがつくり出した木製の壁が膨らみ、そこが熱を帯びて赤く染まった。かと思うとその部分が炸裂し、紫色の禍々しいビームがまっすぐとのびてきた。それは中心にいくほど赤みがかり、外側にいくほど青っぽかった。
「なんなのよ、これ？」リアが驚きの声をあげた。
「ヴァイオレーターの攻撃だ」アルが答えた。「大気中の元素を無理やり振動させて、そうやってできたエネルギーを放出しているんだ」
大気中には火、水、土、風の四つの元素が含まれており、一般的に魔法と呼ばれる奇術は、この元素を用いて行われる。人間がもつエーテルというエネルギーを放出し、元素と結合することによりエ

レメントと呼ばれる物質に変化するのだ。火の元素を用いれば、火のエレメントが生まれ、炎を発生させる。水の元素ならば、水のエレメントが生まれて水が発生するといったぐあいだ。それが掟であり、法である。しかし、ヴァイオレーターがやってみせたのは、元素を無理やり拘束、収斂し、振動を起こさせてエネルギーを発生させる攻撃だ。まさにその法や掟を破る行為だ。故に彼らはヴァイオレーター（違反者）と呼ばれている。

残った壁ががらがらと音を立てて崩れた。もはやヴァイオレーターは球体をしておらず、這いずりまわる甲殻類となっていた。鎧の先には顔があり、意思なき目が虚ろにどこかを見ることもなく見つめている。ヴァイオレーターは彼らを発見するなり、猛スピードで突進してきた。

「飛び降りるぞ」アルが言った。

この狭い場所では逃げ惑うことも、ましてや突進してくるヴァイオレーターの横をうまく通って奥の道へ進むこともできなかった。そこでアルは飛び降りることを決意し、マコも状況を理解して彼に向かってうなずいてみせた。

「それしか方法はなさそうね。こんな狭い場所で戦って、どうせ振り落とされるだけだもん」リアはそう言って崖の淵に向かった。

「え、本気なの？」クロネは当惑した表情を浮かべた。

「ああ、そうだ。できるだけ同時に飛んで、みなで固まって落ちるぞ」アルはマコに目を向けた。「あとはわかるな。頼んだぞ、マコ」

三人は同時に飛び降りた。クロネだけが、一瞬ためらったのち、ちらりとうしろを見やった。すると背後には甲殻類のようなヴァイオレーターが無数の足を必死に動かして、こちらに向かっている。彼女はぞくぞくと身を震わせた。クロネは虫が嫌いだった。とくにあの細い脚が。

クロネは肚を決めて飛び降りた。

マコルディス・クイーデルは顔面に風を受けながら、頭からまっ

さかさまに落ちていた。下から吹きつける風は強力で、目が痛かったが、彼はしっかりと前を見据え、迫りくる地面を凝視している。崖は結構な高さがあり、地面まではまだほど遠かった。

マコの少し右前方をアルが両手を広げ、その少しうしろをリアが両手をバタつかせながら落下していた。クロネの姿はなかったが、自分よりうしろを確認することができなかった。

とにかくマコは自分の仕事をすることにした。右手を首のうしろにまわし、一葉の剣の柄を握る。それを背中から取り外すと同時に、大きく振りまわしながら剣を体の前に持ってきた。すると緑色の美しい剣がその姿を現した。

少年が剣を地面に向かって一振りすると、突風が生じ、地面とぶつかって砂埃を巻き上げた。その風が上に向かって吹き荒れ、マコたちの体を少しだけ押し上げて落下速度をいくぶんか軽減した。

マコはその衝撃を利用して体を半回転させると、足から着地した。その少し前にアルが片膝をついて着地し、それを追うようにリアが背中から落ちた。彼女は背中で体を支えたまま上空を見る姿勢になっており、足は顔の上に投げ出されていた。

マコは辺りを見渡し、クロネがいない事を確認すると、上空を見上げた。そこにも彼女の姿はなかった。まだ崖の上にとどまっているのだろうか。ふと、羽を持ったさっきとは別のヴァイオレーターが近くの上空を飛んで行くのを目にした。あれが足につかんでいるのは、どこか人の形をしているとマコは思った。

「クロネがいないよ。まだ崖の上にいるのかも。もしかしたらヴァイオレーターが―？」

「クロネなら、あれに捕まったわよ。アタシ、見たもん」リアが着地というよりは落下したままの姿勢で言った。指は飛行型のヴァイオレーターを差している。

「それを早く言ってよ！」マコが声を張り上げた。

「大丈夫だろ。いざとなったら雷を落として、逃れるさ」アルがのんきに言ったが、マコは事態がそれほど気楽なものではないと思っ

た。彼が心配して見守る中、飛行型のヴァイオレーターはどんどんと遠ざかるばかりだ。
「捕まったときに頭をぶつけて、気を失ってたわよ」体を回転させて立ち上がりながら、リアが言った。
「それを早く言えよ！」今度はアルが声を張り上げる番だった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7922z/

マコと一葉の剣　グラス・オニオン

2011年12月25日14時59分発行